

2023年 (令和 5年)
2月号 (No. 933)

公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価 1部 150円

会員の会報購読料は年会費に
含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目 次

第2回GHT踏査レポート(上)ルンバサンバ峠を越えマカルーBCへ……1
 マナスルとアマ・ダブルム ファスト・マウンテニアリング報告……4
 「引き継がれる山岳祭」プロジェクトがスタート……6
 不定期連載■最新海外山岳会事情②……7
 追悼 登山人生を味わい尽くしたぶーちゃんに乾杯……8
 連載■ご当地アルプス登山案内
 ①播磨アルプス……9
 ②新龍アルプス……10
 東西南北……12
 支部だより
 東京多摩支部/宮崎支部……13
 図書紹介……15
 新入会員……16
 図書受入報告……16
 会務報告……18
 ルーム日誌……18
 会員異動……18
 INFORMATION……18
 編集後記……19

▶日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木……10~20時
水・金……13~20時
第2、第4土曜日……閉室
第1、第3、第5土曜日……10~18時

第2回GHT踏査レポート(上) ルンバサンバ峠を越えマカルーBCへ

吉井 修

2020年春に実施した第1回グレート・ヒマラヤ・トラバース(GHT)から2年、春・秋4回の機会をコロナ禍で見送ったが、昨年秋、10月1日~11月26日の期間で、ようやく第2回G・H・Tを実行に移すことができた。ネパール東部山域からクーンブ・ヒマールへ、その山旅を2回にわたって報告してもらう。

西堀さんの言葉に背中を押されて
私は第1回GHTの直前、2019年の年末まで銀行員であった。重廣恒夫さん、松田宏也さんとヒマラヤに行くと言うと、「あなたは何者ですか」とよく聞かれた。銀行員としてはよく山に登ってきたのだから、仲間とともに一般路を歩く、山好きのサラリーマンであった。

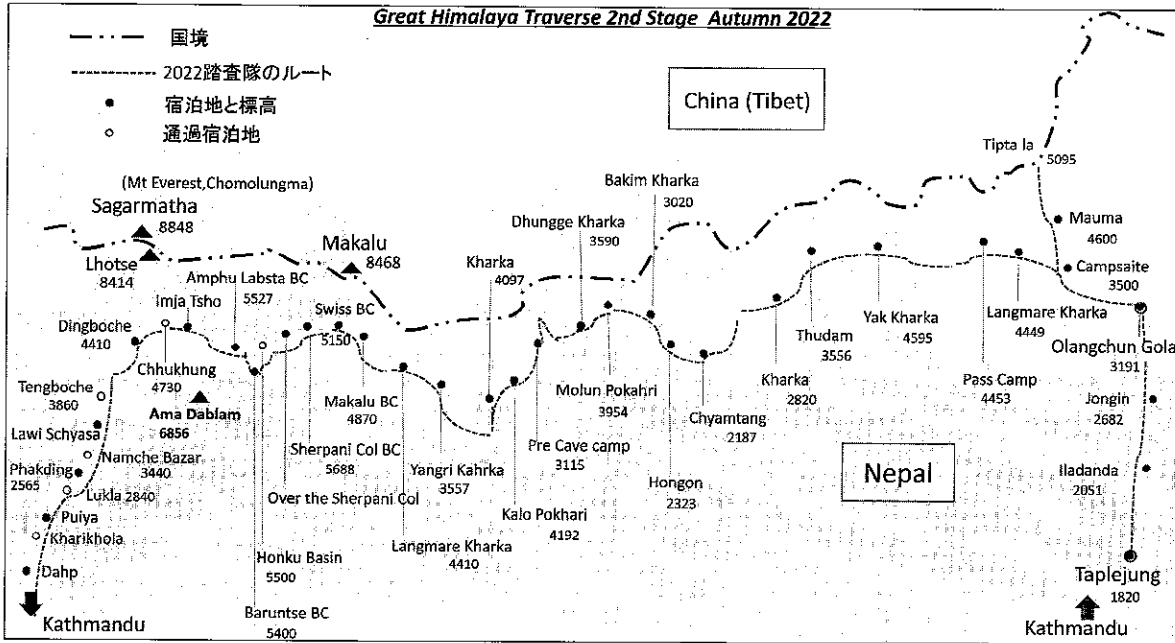
GHTに参加するのに不安がないはずがない。ただ、仕事の上でもその著書からたくさんの示唆を受けてきた西堀榮三郎さんの文章に「……とにかく、強い願いを持ち続けていけば、降って湧いたようにチャンスがやってくるものですよ。その時、取り越し苦労などしないで、躊躇なく勇敢に実行を決意することです」というのがある。まさに降って湧いたように重廣さんか

らGHTの計画を聞いたとき、58歳とまだ早かったが、思い切って会社を辞める決意をした。

第1回GHTでは、長期間ヒマラヤを歩き、未踏峰バブクカン(6244m)を目指すという、自分にとつて全く未知の挑戦があった。今回の第2回GHTには、5500m以上でおよそ1週間行動し、「スリー・コル」と呼ばれるシェルパニ・コル(6180m)、ウエス・コル(6190m)、アンブ・ラプツァ(5845m)を越えるという、これまた初体験のことがある。自分にとつて初めてのことは、やはり不安と躊躇が付きまとう。今回もまた、西堀さんの言葉に背中を押されての出発であった。

3月9日イラダンダ~10日ジョン

ギン~11日オランチュン・ゴラ~12日(同地休養)
今回の隊は重廣隊長(74歳)、藤井正善さん(75歳)、丸尾祐治さん(77歳)、私(61歳)の4人。10月1日にネパール航空の直行便でカトマンズ入り。ダサイン(ネパール最大の祭り)の影響で当初の予定より1日遅れて、7日にタブレジュン着。9日、ジープで前回は帰路に走った悪路をイラダンダの手前まで入り、15時50分から今回の第一歩を踏み出した。イラダンダまでは2時間ばかりだが、雨に降られた上に日没、ヒルにも襲われて、前途多難の出発であった。
11日にオランチュン・ゴラ(3191m)着。ここまでは前回通った道で、前回と同じバツェイ(茶店)に宿泊。この日は重廣隊長



の75歳の誕生日で、このよ
うな山中にも
かかわらず、
ガイドたちが
粋な計らいで
ベースデイ・
ケーキを作り、
皆でお祝いし
た。翌12日は
休養日。午
後、487年
前の建立とい
うゴンパ（寺
院）を訪ねた
が、後は終日
雨が降ったり
やんだり。村
から見える山
の上は、雪で
白くなってい
る。ここから
いよいよ西へ、
前回の続きの
GHTルート
を歩むことに
なる。悪天だ
と辛い。モン
スーン明けは
いつだろう。

13日キャンプサイトへ14日マウマ
へ15日マウマへティプタ・ラ手前
往復16日キャンプサイト
 天気を感じていたが、13日の
朝は青い空、快晴になった。村を
抜けるともう通信はつながらない。
タムール川沿いのよく踏まれた道
をキャンプサイト(3500m)へ。
ここで1泊し、ここからいったん
GHTのルートを外れて北へ、テ
イプタ・ラ(5095m)往復を目
指した。ティプタ・ラは西本願寺
派の僧侶であった青木文教が19
12年、チベットに入る際に越え
た峠である。
 計画ではティプタ・ラに1泊す
る予定であったが、コロナの影響
で国境は閉鎖、今は峠まで行けな
いという。3930mのマウマに
2泊、そこから行ける所までピス
トンすることにした。行く道はチ
ベット側から下りて来ている車道
だが、現在、車両は通っていない。
15日は8時前に出発、13時40分ま
で登ったが、ティプタ・ラの手前
直線距離にして800m余りの所
で折り返した。峠に達することが
できなかつたが、4000mを越
えて丸一日の行動は、高度順化に
は効果があったと思われる。

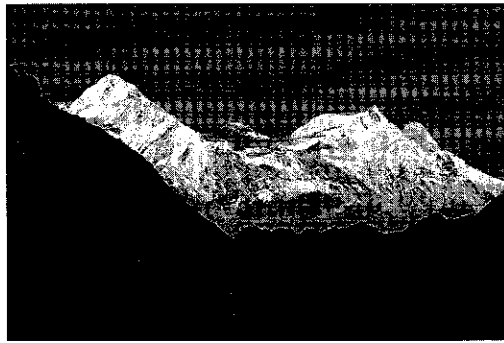
17日ランマレ・カルカへ18日バ
ス・キャンプへ19日ルンバサンバ
峠越えへヤク・カルカへ20日トウ
ダム
 16日にキャンプサイトに戻り、
翌17日、3500mのキャンプサ
イトからランマレ・カルカへ、G
HTルートをルンバサンバ峠へ向
かう。18日、パス・キャンプ(45
95m)へと次第に高度を上げた。
振り返ると登って来たディンサン
バ・コーラの谷が雄大だ。
 19日はいよいよ前半戦の山場、
5159mのルンバサンバ峠越え
だ。南西方向に雪が残る斜面を登
って行く。右手にディンサンバ・



10月19日、前半の山場であるルンバサンバ峠を越える



ルンバサンバ峠の登りから見た、左からカンチェンジュンガ、クンバカルナ、カプルー



10月20日朝、待望のマカルーが見えた。中央手前が重慶隊長らが登った東稜。右はチョモ・レンゾ

コーラの広大なモレーンを見送り、左手後ろ、東の方を見ると白い山が連なる。おおつ、カンチェンジュンガとクンバカルナ(ジャヌー)だ！さすが、ひときわすばらしい。11時、ルンバサンバ峠。峠は一面の雪であったが、堅雪にうつつらと新雪の状態で助かった。峠を辞し4595mのヤク・カルカまで高度を下げてテント泊。

翌20日朝、昨夕は雲で見えなかつたが、西の方、見下ろす谷の向こうに白い山が見える。なんとマカルーではないか！三角形の美しい姿、向かって右側、東稜が頂上に突き上げている。1995年、重慶隊長率いる日本山岳会隊が挑

んだ尾根だ。長大な稜線が見えるが、それでも東稜の一部しか見えていないとのこと。

この日はひたすら下り、3556mのトゥダム村の前を流れる川の対岸にテント泊。8日ぶりの人里は、民家は10軒ばかり。ポーターたちが泊まる家を訪ね、村の話を聞いた。

21日カルカ〜22日チャムタン〜23日ホンゴン〜24日(同地休養)

21日は途中から谷を離れて、谷底をはるか下に見下ろしながら山腹を縫っていく。トゥダムで訪問した家のおばさんが隊についてきて、小屋を開け、ポーター向けに

営業、隊員はその横にテント泊。22日も山腹を縫いつつ下降、昼前にアルン川の豪流を吊り橋で渡り、15時ごろチャムタン村に入った。ここからホンゴンまでは村々を縫って進む。今回のルート中では最も標高の低い部分。

ネパール語が堪能な丸尾さんに村人が話し掛けてきたが、「こんな爺さんたちで、よくも山を越えて来たな。まだ先に進むのか」と言っているとのこと。年齢を聴かれるとそれも当然、苦笑するしかない。23日ホンゴン着、24日は12日ぶりの休養日。洗濯と村の長老に話を聞きに行った以外は、ゆつくり過ごした。夕刻、ドイツ人女性2人が到着。なんと2020年にカンパチェンで会った2人。コロナ禍の時を経て、よく似た者同士の奇遇に驚いた。

25日バツキム・カルカ〜26日モルン・ボカリ〜27日ドウンゲ・カルカ〜28日ケーブ・キャンプ手前〜29日カロ・ボカリ〜30日カルカ〜31日ヤングリ・カルカ〜11月1日(同地休養)

ホンゴンとヤングリ・カルカには、南のヌムからそれぞれ道が通

じている。ルンバサンバ峠を越えたトレッカーは、ホンゴンからヌムに下る。マカルーBCを目指す人は通常、ヌムからヤングリ・カルカに入る。それ故この間のGH Tルートを歩く人は少ないようだが、この間は山を越え、谷に下つては登るの繰り返し。これがなかなかのスケールでやってきて、これぞ僻遠のロングトレイルという様相。ルートが不明瞭な所もあったし、橋が流れて、数時間に及ぶ迂回を強いられた所もあった。

31日にバルン溪谷まで出ると、対岸にヌムから北西に上がって来ているのがマカルー街道で、そこらはよく踏まれた道。その道と合流して間もなく、ヤングリ・カルカに到着した。

計画では、マカルーBCでタブレジュンのポーターを解雇する予定だったが、2日早めて、ここで解雇することに。彼らはカトマンズに戻るポーター2人と不要になった荷物を運んで、マカルー街道を下る。11月1日は装備の仕分けと賃金・ポーターの支払い。明日からは、カトマンズからの7人と隊員4名の態勢で進む。2日後にはマカルーBCである。